

吉野復興大臣の秋田県訪問ぶら下がり会見録
(平成29年9月5日(火) 18:00~18:10 於) 秋田市)

1. 発言要旨

ハード面の復興は進んでおりますけれども、ソフト面、特に全国に避難している方々がおられます。そこへの色々な相談窓口、通称「よろず相談所」というのがございます。全国に26か所ございます。そのうちの一つがここ、秋田県でありまして、この秋田県は、青森県、岩手県、そして秋田県、この3県を担って、色々な形で福島県から避難している方々、また岩手県、宮城県から避難している方々の色々な悩み事を聞いてくれて、そして支援をしていく、そういうところでございます。

今日お話を伺いまして、一番うれしかったのは、例えば福島県から避難した方々は全く知らない土地でありますので、本当に不安に思っていると思います。ところが受け入れてくれた方々は、自分の家族としてお付き合いをして、最後はふるさとに帰るわけですが、ふるさとに帰ったらここで学んだこと、ここで経験したことを今度はふるさとで行っている、そのリーダー的なこともしているということを知りまして、本当にうれしく思いました。

復興庁としまして、平成30年度の概算要求の中に、全国26か所のこういうよろず相談所での色々な課題、それぞれの課題があると思っておりますけど、その情報を共有して、交流会をこれからしていくというの盛り込んでございます。そして、支援をしている方々が6年半経っておりますので、色々な形で疲れも見えております。支援者の支援という新たな部分も、今度の予算の中に盛り込ませていただいたところです。

以上です。

2. 質疑応答

(問) 今日1時間半と、かなり予定をオーバーされて意見交換が進んだと思うんですけど、どのようなお話を具体的にされたんでしょうか。

(答) 具体的には、私が一番心に残ったのは、特に秋田パドラーズさんという支援団体なんですけど、ここはカヌーをつくって、そしてもともと川のクリーンアップ活動をしている団体なんです。

でもカヌーを通じて、行政がなかなか救えない、支援できないような、本当に呼びかけても来てくれない方々を重点的にターゲットを絞って、支援をしていただいて、そういう方々はやっぱり心がかなり折れている方々が多いものですから、カヌーを通じて、

心が折れたところを真っすぐにしてくれていると。本当にそこは友人、友達、家族というような接し方をして、カヌーを通じて支援をしていただいているというところもございました。

(問) 冒頭の発言で、支援をしている方たちが6年半経って、「支援疲れみたいなものも見えてきている」というふうな発言があったと思うんですけども、具体的にその「支援者の支援」というような単語を先程おっしゃられましたが、どのようなものを想定されていますか。

(答) 心のケアを必要とする支援者もございます。また、先程冒頭申しましたように、支援者同士の情報交換、いわゆる交流会等々も支援者の支援の中に含まれておりますので、支援者同士、本当に色々な方々が支援活動をしていますけど、そのネットワークというところが不十分とは言いませんけれども、まだ不十分なところもございます。そこら辺のところをもっと共有化をしていきたいということです。

(問) 先程、パドラーズさんの話もちよっと出たんですが、26か所、今全部は回られていないかと思うんですが、秋田ならではの、秋田特有のよかったなとか、気付いたこととかもあれば、教えて下さい。

(答) この建物が相談所なんです。だから誰でも場所が分かる。誰もが分かるし、入りやすい。他のところはビルの一室を借りてみたり、場所を見つけるのもなかなか大変なんですね。でも秋田県は、本当にここだと言えば誰でも分かる。特にあと木造の施設ですので温かみがあります。相談する方は緊張して来ると思うんです。それが和らいで、それは秋田ならではのところかなと思います。

(問) 意見交換会の中で、支援者の方から声とかを聞いたと思うんですけども、要望とかって何か具体的にあったんですか。

(答) 色々な事例、宿題を預かりました。一番大きな宿題は、パドラーズさんの宿題でありまして、秋田杉でつくったカヌーを福島県で浮かべたいという要望がございました。これは長沢副大臣が宿題として、必ず福島県で来年の夏、秋田県の秋田杉でつくったカヌーを浮かべたい、このように考えています。

(以上)